

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月21日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2018

課題番号：25370601

研究課題名(和文) 日本語学習者の協働的活動における参加の動機づけ

研究課題名(英文) Motivation of Japanese Language Learners to Participate in Collaborative Activities

研究代表者

元田 静 (Motoda, Shizuka)

東海大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：40349428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語授業における協働的活動を成功させるための一つの観点として「参加の動機づけ」に着目し、その実態と参加に消極的な学習者に対する対応策について多面的に検討したものである。本研究では主に、1) 上級日本語読解授業の協働学習における参加の動機づけ、2) アドラー心理学の共同体感覚の理論に基づくクラス運営、の2点について実践を通して検討した。質問紙調査やインタビューの分析から、活動に対する学習者の心理的実態が明らかになり、問題行動に対する教師の視点の拡大や転換が必要であることがうかがえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は以下の2点にある。1) 参加の動機づけについて、学習者の心理的実態と要因を明らかにした。参加に消極的な学習者と積極的な学習者の詳細なプロトコルから、教師は自分の授業に何らかのヒントを得ることができると考える。2) 多くの教師が協働学習を実施する際に直面すると考えられる参加に消極的な学習者の問題に対し、アドラー心理学の理論を取り入れ、より包括的で本質的な概念である「共同体感覚」をベースにして対応策を考えることを提案した。また、実際の日本語授業で「共同体感覚」に基づくいくつかの対応策を実践し、その過程と成否を明確にした。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on "motivation to participate" as one component of successful collaborative activities in Japanese language classes and examines the actual situation and coping approach for passive learners. In this study, two points were examined through practice: 1) motivation for participation in collaborative learning in advanced Japanese reading classes, and 2) class management based on the theory of Social Interest in Adlerian psychology. Analysis of questionnaires and interviews revealed the learner's psychology regarding the activity; it was shown that it is necessary to expand and shift the viewpoint of teachers toward learner problems.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語授業 協働学習 参加の動機づけ 上級読解 クラス運営 共同体感覚 クラス会議 『学び合い』

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

近年、構成主義の学習観に基づき、協働学習が注目され、日本語教育においても多くの現場で実施されている。これまでの研究によって、協働学習は学習者の学びの質を高め、学びをより効果的なものにすることが示されている。

しかしながら、教室場面では必ずしも全員が活動への参加に意欲的だとは限らない。個別学習を好む学習者もいれば、学習科目に苦手意識を持つ学習者もいる。さらにグループ活動では、自分の能力や思考が他者に顕在化されるため、自己開示を恐れる学習者もいる。協働学習の困難な点は、活動に参加しない学習者がいた場合に、たとえそれが少数であったとしても他のメンバーの士気に何らかのマイナスの影響を与える可能性があることである。また、参加に消極的なメンバーが多数いた場合、参加に意欲的な学習者の発言を抑制してしまうことも考えられる。

このような環境下で、グループ活動を意義ある学習の場とするためには、学習者の「参加の動機づけ」が一つの重要なキーワードになると考えた。「参加の動機づけ」とは、話し合いに積極的に参加し、協働的学習活動をよいサイクルにしよう、そこから自らの学びを深めていこうという参加者の意欲のことである(元田・館岡 2007)。学習者がどのようなときに参加したい、あるいは参加したくないと感じるのか、その要因は何か、教師が取れる方策はあるのかを本研究によって明らかにしたいと考えた。

## 2. 研究の目的

日本語学習者の協働的活動における参加の動機づけの実態を明らかにすること、および学習者の参加の動機づけを高めるために有効な教師側の手段を探ることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 協働学習における参加の動機づけ

7期に渡り、上級日本語読解授業においてグループによる読解活動を行い、そのデータを収集した。分析対象としたデータは、授業観察記録、コース終了後の質問紙および学習者へのインタビュー・プロトコルであった。質問紙では、活動に参加したい・したくない場面、参加の動機づけに関わる要因などについて尋ねた。インタビューでは、参加に消極的な学習者と積極的な学習者のプロトコルを取り上げ、分析した。

### (2) 共同体感覚とクラス運営

アドラー心理学の共同体感覚の理論に基づき、クラス全体で参加に取り組む活動を行った。まず、初級クラスにおいて「クラス会議」(赤坂 2010)を実施した。次に、中級クラスにおいて、西川(2010)によって提案された『学び合い』を実施した。分析対象としたデータは、授業観察記録、コース終了後の質問紙および学習者へのインタビュー・プロトコルであった。

## 4. 研究成果

### (1) 協働学習における参加の動機づけ

7期分の質問紙調査の結果から、参加の動機づけに影響を与える要因として、「テキストへの興味」が最も高いことがわかった。コメントから、テキストの難しさは、プラスの意味でもマイナスの意味でも参加の動機づけに関わる要素として注目すべきものであることがうかがえた。一方で、インタビューにおいては「グループメンバー」を挙げた学習者が多かった。これは一見矛盾しているように見えるが、実はテキストとグループメンバーが分かち難く結びついていることを示している。つまり、グループメンバーとの相互作用により、テキストが面白くなったり、つまらなくなったり、あるいは難しくなったりと印象が変わり、質問紙では最終的

な印象として「テキストへの興味」という答えに至ったのではないかと考えられる。また、インタビューの詳細なプロトコルから、参加に消極的であるように見える学習者でも、個人を多角的に見ると、参加に向かう要素が見つかる可能性がうかがえた。最後に、質問紙やインタビューの結果を参考に、グループの話し合いを困難にする行為に対する改善策や、信頼感を醸成し、自由にアイデアを話せる環境をつくるための方策をそれぞれ考え、実践した。

## (2) 共同体感覚とクラス運営

「クラス会議」により、問題行動の多いクラスにおいて共通のルールを作ること成功した。「クラス会議」のシステムがあることで、クラスで問題が発生したときに即座にクラス全体で対応策を考えることができるという利点があった。インタビューからも学習者に概ね受け入れられていることがうかがえた。しかし、HRの時間がなく、日本語の習得を急ぐクラスでは、クラス会議の時間を設けることが難しい。そこで、次に『学び合い』を実施した。『学び合い』では、「一人も見捨てない」という理念のもとに設計された学習方法を用いる。『学び合い』の利点は、教科学習とクラスの風土づくりを同時に実施できる点にある。本研究では週に1回の文法まとめテストで実施した。質問紙調査の結果、多くの学習者がとてもよかったと答えていた。クラスの社会的側面だけでなく、日本語の習得においても有効であることがうかがえた。インタビューでは、非常によかったという学習者と通常のテストのほうがよかったという学習者の両方の意見を聞くことができた。「クラス会議」と『学び合い』は、主に学校教育で用いられることの多い活動であるが、成人の日本語学習者に対しても工夫を施せば使用できることがわかった。

## (3) まとめと今後の課題

本研究では、協働学習を実施する教師の多くが直面すると考えられる「参加に消極的な学習者をどう活動の中に引き込むか」という課題に取り組み、その実態を詳細に記録しつつ、アドラー心理学の理論に基づいたいくつかの方策を、実践を通して検討した。調査やインタビューの結果から、学習者の参加の動機づけを高めるためには、その時々活動だけではなく、共同体としてのクラス全体や、学習者個々人の成長に教師が目を向けることが重要であることがうかがえた。

今後は、今回の研究で収集した活動中の発話データを、参加に消極的な学習者と積極的な学習者に焦点を当て、他の学習者との相互作用の中で分析していく予定である。

## <引用文献>

- 赤坂真二(2010)『先生のためのアドラー心理学 勇気づけの学級づくり』ほんの森出版  
西川純編(2010)『クラスが元気になる! 『学び合い』スタートブック』学陽書房  
元田静・館岡洋子(2007)「短期集中日本語授業における協働的学習 認知面と情意面の観点から」『日本語教育の授業場面における協同学習』(平成16-18年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号16520326 研究成果報告書)

## 5. 主な発表論文等

### [雑誌論文](計8件)

- 元田静(2019)「日本語教育における『学び合い』の実践的研究 クラスの共同体感覚を高めるために」『東海大学紀要国際教育センター』9, pp. 39-57. (査読有)  
元田静・笠倉敬弘(2018)「協働学習の研究手法に関する分析と展望 学会誌『日本語教育』と『教育心理学研究』との比較を通して」『東海大学大学院日本語教育学論集』5, pp. 15-29. (査読有)

元田静・葛西里奈・小林尚美(2017)「日本語学習者の所属感を高めるためのクラスづくり  
“クラス会議”を中心とした実践的検討」『東海大学紀要国際教育センター』7, pp. 59-79.  
(査読有)

元田静(2016)「アドラー心理学の日本語教育への応用とその可能性の検討」『東海大学紀要  
国際教育センター』6, pp. 21-45. (査読有)

〔学会発表〕(計10件)

元田静(2019.2.16)「上級日本語読解授業の協働学習における参加の動機づけ 質問紙とインタビューによる調査から」2019年度国際学術セミナー(於:東海大学)

元田静(2019.1.5)「第二言語としての日本語教育における『学び合い』の実践的研究 学習者による評価を中心に」第17回臨床教科教育学セミナー(於:東京都立科学技術高等学校)

元田静・笠倉敬弘(2018.2.14)「協働学習の研究方法に関する一考察 談話の分析を中心に」2018年度国際学術セミナー(於:バンコク、モンクット王ラカバン工科大学)

元田静(2017.5.6-7)「日本語教育における心理学の活用 学習者をどう勇気づけるか」  
Workshop on Japanese Language Education, 2017 spring (招待講演)(於:コペンハーゲン、  
東海大学ヨーロッパ学術センター)

元田静(2013.11.23)「日本語読解授業における留学生と日本人学生の協働的対話過程の分析」日本教科教育学会第39回全国大会(論文集(『日本教科教育学会第39回全国大会論文集』pp. 44-45)のみ)

〔図書〕(計1件)

奥野由紀子(編著)小林明子・佐藤礼子・元田静・渡部倫子(著)(2018)『日本語教師のためのCLIL(内容言語統合型学習)入門』凡人社, pp. 107-120.

〔その他〕

報告書

元田静(2019)「上級日本語読解授業の協働学習における参加の動機づけ 質問紙とインタビューによる調査から」『日本語学習者の協働的活動における参加の動機づけ』(科学研究費助成事業(平成25-30年度 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C) 課題番号25370601 研究成果報告書) pp. 20-58.

元田静(2019)「多様な母語の学習者に対する内容言語統合型学習に基づいた「PEACEプログラム」の実践と教師の役割」『日本語学習者の協働的活動における参加の動機づけ』(科学研究費助成事業(平成25-30年度 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C) 課題番号25370601 研究成果報告書) pp. 128-140.

## 6. 研究組織

研究協力者氏名: 葛西 里奈

ローマ字氏名: Kasai, Rina

研究協力者氏名: 小林 尚美

ローマ字氏名: Kobayashi, Naomi

研究協力者氏名: 笠倉 敬弘

ローマ字氏名: Kasakura, Takahiro

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。